東京帝國大學圖書

一階
二十一行
四十字
嫁

秋郊雜筆

森田恒友

月

詩歌にも、繪畫にも、日本ほど古来月を称した国は無いであらう。西洋に比して東洋に称された。東洋人と月とは、東洋詩の月は人画人と月とは、[illegible]関係の西洋人の想像と来ぬほどの因縁をもつ。

美しい月は、東洋自然の[illegible]月光は美しい景物ではある。尤も支那のことは想

本間文庫
文庫 14
A131

郊

備するだけでは[illegible]あるが。寒さ負日本に於いては美しい自然の景物である。

寒陽氏は秋になって、月が澄んで来ると、日本の自然の、如何であるところに居ても、[illegible]の美しさを称せぬものはあるまい。それで月は、古来の詩人が最も多く称賛したように、寒陽氏、秋、月、が[illegible]春よりも夏よりも冬よりも一番美しいに違いない。秋の月は称[illegible]された。称ずれば古

明月の夜、[illegible]の家の縁側にて、[illegible]絵画に扱はれた月のことなど思ふ。

された所で、それだけ最も美しいのに違いない。彼は全く秋に於いて[illegible]明輝を放つ。

[illegible]と[illegible]と[illegible]明月を見るべき東洋画の中で多く月を取り扱ったのは、南画と古代流とであろう。だが前者は多くは高士、隠士の月、後者は多く殿上人の月であった。東洋画中の自然派である所の二流の画人に取り扱はれた月でさへ、あらゆる人生に見られた月ではなかった。時に南画の画半

月下撫夫が描かれ、野人月を眺める図はあっても、芒木芽は直に撫夫や野人で、月を称する図ではない。矢張り画中の月を称して居る人は高士隠者である。元々高士隠士の系統に起つた、我の画系の自然の成行ではあろうが、東洋画流中の自然流の化身として、もっぱらいろいろの人生から見られた月が描かれたい。一番手近くたモットト平民に見られた月の多く取り扱はれたならば、南画はモットト一般野人にも親しい自然画流として

根強い存在をもつてゐたろうとも思つて見るのが、文芸にたづさわり得るものは、富士隠士か、大官人かの時代にあつては、[illegible]

画者自身の生活を出て得ない、矢張り自然の発足であろうか。

南画も極り大雅の生活に入つて、大に野趣を帯びて来、愛を包含して来た。彼の人のみは[illegible]南流の中の卓絶した自然愛の画人と。恋に得る。彼の人に描かれたものは、月も岩も草も彼れが見ても新し

く見へる月や岩や草やに惑ひ得る。大自の生活に入れば明月は明月にして、極めて親しい明月の輝きにあるのだ。西人の生活が月に入るか、月が西人の生活に入るか。何れにしても、私は唯一草花の様に足投げ出して眺めた明月の面を、さういふ自然西洞の厳存することを希ふのだ。

それは恐れ多い、月は東洋に於いて極めて美しいことを私は言ひ切れないであらう。殊更日本の自然の美を称するには、如何に月並であつても、

月の美しさを真先に称さねばならないであろう。日本の夜は全く月の美しいことによつて、如何に真の生活は楽しいか知れぬ。

大自の懐、私の生れた異郷の庭に、樹蔭が持ち出されて、昔流を偲ばせるかさねあがら眠つた私共しい記憶も、秋の月明の夜に限られた。西生活に入つてから、私は、数年暮れて宿を求め アール布樹への私の祝は、西トを去。やうやくに疲れた脚を思ふ所の孤宿の二階におなげ出して、一杯の香茶をすゝる空前

に、月の上る美しさは、満月でも出月でも、弦月でも、如何さる形であつても月は美しいと思はぬことは無い。「ときより生意気にちつて居、月の美しさなどを物語るのは、あまりに月並な日本の詩情であると、けあしたことこのあつて、それでも不安のりめしを吸つて数学に出る前、前の森の上に見れば、急ち其の美しさに打たれてしまふ。矢張り如何に平凡の情景でも、月並の詩情でも、美しいものは美しいのだ。悲しいけれども、美しいけれども、彼女は悲しく美しく、楽しく美しいわろう。

ちなみの秋二三の友人と、月見の方を数多しこの砂り、あの辺の小料理に二階に月を眺めたことがあつた。みんな疲れつかれた故か、其の日は皆の眼に多少の楽の色をもつて見た。其の翌日は矢つ張り美しい月でありつたが、どういふものか皆の眼に多少の然をもつて見

られた。その中に世の然をもって見る世界の理由で、彼木は、それと[illegible]流せられて、とうとう[illegible]世界周囲との画的関係に於ける理由に依[illegible]せられた。こういふことは全くそれとの伴りにあってタ[illegible]迫る強勢である。かも知れぬ。一人は月の明らかあるが為めに、月下の丘や屋柱[illegible]あまりにの画的あまりに強く思いしとに理由を附した。私は月の直下に一刷毛横に刷かれた雲が、あまりに細く直線的であることに理由を附した。結局其

理由は、二人の理由の何れもが有力の理由であることに落着したのであったが、それに、[illegible]人にによって見られる月は、往々こんな風に[illegible]形や[illegible]に理由が附される。それは月の美しさに向って時には没交渉である。時には全く交渉でもあり得るのだ。

何れにしても月は美しい。雲があっても、なくても、野に出て、も可、山に上っても可、時には煙突の上に出ても、決して悪くない

6 6枚

い。今更月の美しさを談ずる私ら、古くあつたか。新らしく自然の情を語るか。河北なりても東洋人の月を談ずることは、東洋自然の中に生存する吾々の義務の如くも思へる。であろう。又吾々西洋人の中に浸み入る美の感念に、彼れの美しさは可成りに生大な責務をも持ち得るであろう。